

地域の課題 研究者も考えます

⑧

担い手・移住者



高知工科大 中川 善典教授

「仮想将来人」として不都合な事直視

ロンドン大の認知神経科学者、タリー・シャーロットは二〇二一年、科学誌「ネイチャー」に論文を発表した。人間は嫌な出来事（病気になる等）が自分に降りかかる確率を過小評価しているとき、

住民が将来人になりきり、地域の将来を話し合ったワークショップ＝松阪市で（波瀬村づくり協議会提供）



それを是正するのが苦手なのだという。

この楽観性が地域の未来を考える際に発揮されると大変だ。例えば三十年後に地域人口が半減するはずなのに、あるいは耕作放棄地がこのまま増えれば農地や林地の獣害被害の拡大が確実なのに、それを直視せぬまま、ずるずると三十年を過ごしてしまう。

不都合な事を直視し、今の延長線上にない地域の未来像を大胆に描き、そこに向かって第一歩を踏み出すには、どうしたらよいか。その手段の一つが、総合地球環境学研究所の西條辰義・特任教授（経済学）が提唱する「仮想将来人」という概念だ。

地域の未来像描き行動を

今年四月、松阪市の飯高地域の約二十人の皆さんが三班に分かれ、五〇年の将来人になりきり、地域の未来像を描く画期的な試みを行った。松阪市と名古屋大がそれをサポートした。一つの班は次のように考えた。

「二〇二一年から半減した人口は、その大半が一地区に集まってコミュニティを形成し、そこから山や田んぼへ『通勤』する。スローライフに憧れる若者たちも移住してきてくれた。山の手入れは、きれいな水の恵みを活用する企業も担っている。こうして何とか幸せに生きていられるのは二一年以降の人の努力のおかげだ」と。

そう考えれば、今度は二一年の現代人に立ち返り、未来人のために何かを開始せざるにいらなくなるだろう。飯高の今後の変化に注目していきたい。

名古屋大学持続的共発展教育研究センター